

King and Beggar

リチャード二世の悲劇の一考察

舟 木 茂 子

Richard II が書かれた時期の Shakespeare の一連の作品は、その抒情性が際立った特徴となっている。*Richard II* では、散文は一切使われず、全て韻文で書かれ、しかもその韻文は非常に修辭的技巧が目立つものである。この美辭麗句の多い作品 *Richard II* を同じ時期の他の抒情的作品と比較すると、他の作品、特に喜劇では、そこに使われた詩の華麗さが、作品全体の雰囲気につながっていくが、この *Richard II* では、そのような傾向はみられない。*Richard II* の一見華やかな詩は実は、その使い方によって、皮肉にも主人公 Richard の悲劇につながっていくのである。

John Dover Wilson は、“*Richard II* ought to be played throughout as ritual”⁽¹⁾ といい、主人公 Richard について次のように述べている。

To the contemporaries of Shakespeare Richard was no ordinary man; and it is by failing to realize this that modern criticism, despite all its penetrating, and for the most part just, analysis of his human qualities, leaves every thoughtful reader and spectator of the drama baffled and dissatisfied. Richard was a king, and a good deal more.⁽²⁾

Wilson は、Richard の symbolical meaning に重点を置いている。当時の英国の状態、英国人の意識、すなわち Shakespeare の作品、特に歴史劇とその時代との関係は、現代の我々でも、充分考慮せねばならないのももちろんである。しかし、こうした問題を念頭におきつつ、Shakespeare

の芸術作品 *Richard II* を考える時、そうした枠組を越えたものが認められる。Wilson の言う “Richard was no ordinary man” に、Richard の悲劇の一つのポイントがあるように思われる。

M. C. Bradbrook の *Shakespear and Elizabethan Poetry* の一節に次のような部分がある。

The dichotomy between Man and Office ‘the deputy anointed by the Lord’ and the man who
lives with bread like you, feels want
Tastes grief, needs friends...

(3. 2. 175-6)

is one which Shakespeare was to treat again and again under many aspects...⁽³⁾

Richard の公的な面と、私的な面を考察していくとそこに一つの Richard 像が浮かび上ってくる。

Richard 自身は、‘God’s anointed King’ であるという意識が非常に強い。

We were not born to sue, but to command,

(I. i. 196)

Now by my seat’s right royal majesty,
Wert thou not brother to great Edward’s son,
This tongue that runs so roudly in thy head
Should run thy head from thy unreverent shoulders.

(II. i. 120-3)

こうした Richard が Ireland 遠征から戻った 3 幕 2 場の有名な Wales の海岸での場面では、祖国英国に帰った喜びを涙ながらに、

I weep for joy
To stand upon my kingdom once again:

(III. ii. 4-5)

と言ひ、英国に対する熱烈なる愛情を、久しく会わなかつた母子にたとえて、Wales の地に向つて投げかけるのである。そして、

So, weeping, smiling, greet I thee, my earth,
And do thee favours with my royal hands;

(III. ii. 10-11)

と言う。これらのセリフにみられる “my kingdom”, “my earth”, “royal hands” 等にやはり、Richard の強い王権意識が見出せる。Richard の支柱になっているものは、Ptolemy 的な秩序観で、この3幕2場のセリフで彼がめんめんと情緒的に言い表わそうとしているのは、この秩序がくずされ、正統な国王の威厳が失われていきそうなことへの不安と怒りである。そして、その状態にあつてもなお、自らの権威をたしかめようとする態度である。

Feed not thy sovereign's foe, my gentle earth,
Nor with thy sweets comfort his ravenous sense,
But let thy spiders that suck up thy venom
And heavy-gaited toads lie in their way,
Doing annoyance to the treacherous feet,
Which with usurping steps do trample thee.

.....

This earth shall have a feeling, and these stones
Prove armed soldiers, ere her native king
Shall falter under foul rebellion's arms.

(III. ii. 12 ff.)

この場面で Richard は rhetorical question を何度となく使う。

... am I not king?
Awake thou coward majesty! thou sleepest.
Is not the king's name twenty thousand names?
Arm, arm, my name! a puny subject strikes
At thy great glory. Look not to the ground,

Ye favourites of a king, are we not high?

(III. iii. 83-88)

この Richard の rhetorical question は、自分自身に向けた疑い、反省というより、そうした意識を全く持たない、あくまでも自分は正統な王であり、神聖にして犯すべからざる、最高の力を持った王であるという従来の態度を保持し、表現しているものである。

この Richard がついに Bolingbroke に王冠を譲ることになる。4 幕 1 場の ‘deposition scene’ は非常に儀式張っており、Richard は技巧的なセリフを言いながら、王冠を渡す役を演じるのである。その結果 Richard は “unkinged Richard” (IV. i. 220) となる。Richard の性格は、情緒的で、行動に欠け、自己劇化の傾向を持つことは、多くの批評家によって指摘されている。Bolingbroke と比較すると、Richard は非常に多く自らを語り、彼の苦悩を言葉にし、心の動きを雄弁に示す。しかしここで、彼が、彼自身を如何に雄弁に表現しようとも、Richard の意識は決して、深く人間としての自己に向けられていないことに注意しなければならない。彼の意識にあるのは、常に King としての Richard である。この Richard が “unkinged Richard” になった後、果してどういう姿となるのであろうか。

Bolingbroke が王冠を手に入れた後の、Bolingbroke 上位、Richard 下位の新しい位置関係における兩人について、Irving Ribner は次のように言っている。

Henry IV's triumph as King of England is at the same time Henry Bolingbroke's moral downfall as a man. In the same manner Richard's downfall as a king leads to his regeneration as a man.⁽⁴⁾

さらにこの Richard について次のような解釈をしている。

In his farewell to his queen we see a stoic resignation which enables

him to accept his fate...⁽⁵⁾

Richard's awareness of his brotherhood to 'grim necessity' may be regarded as the culminating evidence of a growth in self-knowledge which had begun with his first awareness of Bolingbroke's inevitable triumph.⁽⁶⁾

ここで最後の prison での “unkinged Richard” の独白をみてみよう。

Thus play I in one person many people,
 And none contented: sometimes am I king,
 Then treasons make me wish myself a beggar,
 And so I am: then crushing penury
 Persuades me I was better when a king;
 Then am I kinged again, and by and by
 Think that I am unkinged by Bolingbroke,
 And straight am nothing.... But whate'er I be,
 Nor I, nor any man that but man is,
 With nothing shall be pleased, till he be eased
 With being nothing....

(V. v. 31-41)

ここで Richard はまだ「ある役割を演じる態度」を持ち続けている。色々な人間を思い浮かべるが、どれも自分を満足させてはくれない。王位を失ったけれども、時には王とってみる。しかし，“unkinged Richard” であることに気付き、次に “beggar” になってみる。それではこの “beggar” はどういうことを意味しているのだろうか。人間を外側から飾るものを取り去った、王位も何もはぎとったなまの人間、裸になった人間性を意味しているだろうか。

Richard II において、この Richard の独白に至るまで、すでに、“beggar” という言葉が出て来ている。まず1幕1場で Bolingbroke は “pale beggar-face” と言う。この後、“beg” という語もたびたび使われており、この *Richard II* での “beggar” は、*N. E. D.* の “1. One

who asks alms, especially habitually; one who lives by so doing” と “3. One who begs a favour; one who entreats, a suppliant” の重なったものと考えられる。ここで先に引用した Richard の “We were not born to sue, but to command” というセリフが思い起こされる。ここでは “beg” ではなく “sue” という語が使われているが, “beg” を使った場合と同じような効果が含まれていよう。Richard の 5 幕の独白の直前にも “beggar” という語が使われている。5 幕 3 場で, Duchess of York は, 息子 Aumerle の謀叛の計画に加った罪の許しを求めに, Aumerle と York の後を追って Bolingbroke の所にかけてつける。

Duchess: A woman, and thy aunt, great King—'tis I.

Speak with me, pity me, open the door.

A beggar begs that never begged before.

Bolin.: Our scene is altered from a serious thing,

And now changed to 'The Beggar and the King':

(V. iii. 76-80)

この ‘The Beggar and the King’ は, Percy の *Reliquis* に含まれている King Cophetua と the Beggar-Maid のバラードへの言及であろうと言われている。その原典はともかく, この場面での扱われ方について, I. B. John は次のように言っている。

Bolingbroke is merely struck by the farcical aptitude of the title; no reference to the subject [of the ballad] is thought of.⁽⁷⁾

皮肉な調子さえ Bolingbroke の言葉には感じられる。

先に引用した *N. E. D.* には “3” の意味で, Puttenham の *English Poesie* の “He had spent much and was an ill beggar: the king answered... If he be ashamed to begge, we are ashamed to give. (III. xxiv. 247)” を引いている。こうした例からみると, ‘beggar’ と ‘king’ を並べることは, 当時よく行われていたようである。そしてこの

‘beggar’ と ‘king’ は、表と裏の関係をなしている。*Richard II* における “beggar” は、この作品中しばしばみられる “flatter”, “flatterer” と合わせて考えてみると独特の意味合いをもってくる。5幕5場の独白で、“king” と “beggar” の間を行き来する Richard は、王と一個の人間の間を彷徨しているのではない。ここにおいてもなお、Richard は王権意識の虜となっており、“king” でなければ “beggar” という役となるうとするが、もちろん満足できない。そこで “unkinged Richard” は “nothing” となるのである。

Richard II では、否定的表現が多いのに気付く。Richard の5幕の独白の “nothing” もその例である。この “nothing” は *King Lear* にみられる “nothing” とははっきり違っている。*Richard II* における “nothing” は否定的意味だけに終わっている。こうして見てきたとき、先に引用した Ribner の “regeneration as a man” とか “the growth in self-knowledg” ということを Richard の中に見出すことはできない。

Bolingbroke が追放の身でありながら、英国に戻った理由を彼は次のように言っている。

...I come but for mine own.

(III. iii. 196)

つまり、Richard が Bolingbroke の父 Gaunt から奪ったものを取り返そうというのである。彼は自分の名誉を回復し、公爵としての当然の権利を主張し、奪われた財産を取り戻そうというのである。Northumberland も次のように言う。

The noble duke hath sworn his coming is
But for his own...

(II. iii. 148-9)

この Bolingbroke の “mine own” は一応上のように解釈されるが、劇の進行と共に、この “mine own” は、王冠を手に入れることになってい

く。この推移は、*Richard II* の最大の問題点であるが、この Bolingbroke の “mine own” と同じような言葉が、Richard にもみられる。

An easy task it is to win our own....

(III. ii. 191)

Richard は、Bolingbroke の “mine own” に対して ‘royal we’ の “our own” を使っている。そしてこの “our own” は、Bolingbroke の英国上陸によっておびやかされている王権を確実に自分のものにするものである。あくまでも ‘King’ の立場に立っている。Bolingbroke の “mine own” と Richard の “our own” は、この作品を解く一つの鍵である。“our own” という語で自己の権利を主張していた王位を失った “unkinged Richard” には、“our own”，否，“mine own” という語で表し得るものはなく、彼は “nothing” となるのである。

ここで先の Bradbrook の言葉 “dichotomy between Man and Office” を思い起こしてみよう。Richard は常に “Office” に対する意識にとらわれていた。彼は、その場その場の状況に対して、すぐに反応を示し、それを表面に表す。我々は、彼の言葉を通して彼の心の動きを追うことができる。その彼に、主観的、情緒的な態度を見出すことができる。しかし、自らの感情を口にすることが、すなわち、自己に対して意識が向けられていることとはならない。むしろその時々 of Richard の表現方法を考えると、人間としての自己に対する目が欠けていることに気付く。

この作品は、王権を中心にした英国々政を扱い、登場人物も王を始め、そうした公的面に関わりをもっている。一方、それぞれ人間としての面、私的な面をもっており、私的なレベルでの人間関係も、この作品で重要な位置を占めている。そして公的面と私的面の交錯がこの作品をより複雑にしているとも言える。しかし Richard にあっては、むしろ公的面と私的面が分離していないところにその特徴がある。両面がはっきり意識され、

その上でバランスがとれた状態で融合された場合が、理想的な人間像となるのであるが、Richard には、そうした状態は最後まで見出せない。このことは、D. Wilson のいう、人間的な面を強く考えるべきではない、ということとはもちろん全く違うのである。‘King’の意識にとらわれ、“unkinged Richard”で終る Richard の「人間像」が、彼の悲劇の一つの原因となっていると言えよう。

注

- (1) John Dover Wilson (ed.): *King Richard II*, Cambridge, 1951, p. xiii.
- (2) *Op. cit.*, p. xvi.
- (3) M. C. Bradbrook: *Shakespeare and Elizabethan Poetry*, London, 1951, p. 124.
- (4) Irving Ribner: *Patterns in Shakespearian Tragedy*, London, 1960, p. 46.
- (5) *Op. cit.*, p. 49.
- (6) *Op. cit.*, pp. 49-50.
- (7) Peter Ure (ed.): *King Richard II* (Arden Shakespeare), London, 1956, p. 163 (note).